

殴り合いの文化史

序……008

## 1章 人間的な暴力……015

- 1-1 そこにある暴力……017  
血みどろの共同体／身内の殺害
- 1-2 闘争の擬態……022  
儀式から見世物へ／闘争を見る喜び／モハメド・アリ——闘争のしゃべり／にらめっこ／目の暴力
- 1-3 残忍な喜び……032  
矢を射刺された聖人／賛美される残忍さ

## 2章 理性の暴力……039

- 2-1 本能と暴力……040  
世界最強の男／攻撃は本能か／子殺しとリンチ／闘争のプロセス

- 2-2 口から手へ……049  
人間の本質／「殴る」類人猿／口の武装解除
- 2-3 遊びと闘争……056  
気晴らしの発生／遊びと成熟／ホモ・ルーデンス／模倣と競争／ラッキーパンチ——運と眩暈／狩猟からスポーツへ／spoofの語源／殴り合いのルール

## 3章 殴り合うカラダ……073

- 3-1 殴り合うカラダのイメージ……074  
自転車ドロボーへの復讐／ベイヨーンの流血男／敗者が勝つ物語／ロッキーのカラダ／アスリートのカラダ／かっこいいカラダ
- 3-2 つくられるカラダ……084  
殴り合いのプロのカラダ／古代ギリシアのスポーツクラブ／拳闘のシンボルは？／太った腹の使い方／減量の職人
- 3-3 名がつくるカラダ……098  
マサト？コポリ？／「五つ星焼き鳥」のパンチ／リングネームとニックネーム／「海老原」はヤバイ!?／姓は「ガッツ」？

## 4章 拳のシンボリズム……109

- 4-1 拳と手のひら……110  
拳の親指／誓いの手のひら／殴る拳

- 4 2 拳はペニス… 116  
ガッツポーズの日／ガッツポーズは文化的／生殖器崇拜／凶暴な拳／殴り合いの挨拶／オバマが広めたフィスト・パンチ
- 4 3 正義の拳… 127  
鉄腕アトム／鉄腕とパンチ／正義の味方はパンチしない／柔よく剛を制する／スーパーマンの誕生／アメリカのニューシネマ／都市労働者のヒーロー／大統領はボクサー／白人男性の「男らしさ」／ヒーローのカラダ
- 4 4 国家による拳の暴力… 149  
拷問と清め／司法との対決／拷問の拳／文化と残忍さ

## 5章

### 殴り合いのゲーム化… 157

- 5 1 闘争のゲーム… 158  
戦闘と決闘／決闘というゲーム／殴り合う民族競技／こぶしうち／足技があっても「拳法」
- 5 2 古代オリンピックの拳闘… 166  
ホメロスが語る拳闘／オリンピックの祭典／ソクラテスも拳闘ファン／拳の装着具／古代オリンピックの終焉
- 5 3 イギリスの拳闘——流血と底力… 175  
イギリス初の拳闘試合／初のチャンピオン／プロトーン・ルール／流血の楽しみ／暴力からゲームへ／プライズ・ファイトの急衰
- 5 4 ボクシングの成立… 188  
ボククス！／スパリングの発生／高貴な自己防衛の技術／プライズ・ファイトからボクシングへ／クイーンズベリー・ルール／時計の時間／流血と底力の排除／決闘の面影

## 6章

### 「殴り合い」は海を越えて… 203

- 6 1 ボクシングは港から… 205  
黒船とともに／アメリカのビュジリズム／イギリスとアメリカのチャンピオン対決／金メッキ時代の殴り合い／日本初のボクシング／横浜のメリケン練習所／異種格闘技の人氣
- 6 2 「二石四鳥」のスポーツ… 223  
柔道対ボクシングのケンカ／日本ボクシングの発足／キャッチコビーは「東郷」／メリケンから拳闘へ
- 6 3 「拳闘」がやってきた！… 234  
ボクシング史の時代区分／初のスーパーアイドル・ボクサー／血の十回戦！／ヤクザも覆せない判定／槍とピストン
- 6 4 玉砕から科学へ… 245  
ボクシングは「青空道場」から／フリーのボクサー／日米合作の世界チャンピオン／日本人の自信回復／テレビとボクシング

## 7章

### 一発逆転の拳… 255

- 7 1 ハングリー精神論… 257  
スポ根漫画の時代／科学より根性

- 7 2 よみがえる矢吹丈……264  
浪花のジョー／もやしっ子から／永遠のボクサー／平成の矢吹丈／ヒーロー誕生物語
- 7 3 逆転の渴望……276  
マサオ・オーバの逆転／復讐のチャンス／アメリカ社会とボクサー／ボクシングとユダヤ人／ボクシングジムという避難所／日本のプロボクサー／人生の逆転
- 7 4 殴り合いと信仰……293  
信仰と勝利／反宗教的なコスチューム／暴力と宗教規範／非暴力、無抵抗という戦法

## 8章 名誉と不名誉……301

- 8 1 凶器の拳……302  
「三度笠ボクサー」のストリートファイト／プロボクサーの正当防衛／勝ったのは誰か？
- 8 2 ピュアで正しい「殴り合い」……308  
暴力の採点／誰も見たことのないパンチ／噛みつきは反則？／暴力への不寛容
- 8 3 つくられる勝者と敗者……317  
ホームタウンデジジョン／アウエーの洗礼／殴り合いへのご招待／咬ませ犬／フィリピンはボクシング先進国
- 8 4 男らしさと名誉……328  
ヴァーチャルな殴り合い／度胸試しと名誉／男性性と女性性／男らしさ／名誉のための決闘／殴打と嘲弄

## 9章 殴り合いの快楽……341

- 9 1 「死と再生」の物語……342  
ボクシングは麻薬／燃えつきること／テントボクシング／イニシエーションと現代
- 9 2 殴り合いと快楽……354  
三島由紀夫とボクシング／カラダと陶酔／無害のマゾヒズム

## 10章 女性化する拳……363

- 10 1 ボクシングと女性……365  
女性の権利の拡大／ジャック・ロンドンの時代／女人禁制のボクシング会場／女性の殴り合いの楽しみ方／『ミリオン・ダラー・ベイビー』の成功／日本の女子ボクサーたち／「あばずれ」女の殴り合い／男もすなるボクシング／殴り合いの模倣の模倣／ボクシングの女性化
- 10 2 殴り合いは続く……385  
暴力の減少／デイビー・ムーアを殺したのは誰？／脳へのダメージの競い合い／ボクシング廃止論／同意ある暴力／殴り合いの未来

あとがき……406

註……x

参考文献……i

人が人を拳で殴ること、これはきわめて人間的な暴力だ。こんなことを言ったら、「そんなバカな！」とびっくりするかもしれない。「拳で人を殴るなんて、動物的に決まっている。衝動的で感情的だし、自制心が利かず、行き過ぎていてではないか」と。たしかにドストエフスキューも『カラマーゾフの兄弟』のなかで、従卒の顔を二発もぶん殴って血まみれにした若き将校に、「人間が人間を殴るとは！ なんとという犯罪だろう！」と、心の底から後悔させたものだ。

しかし、拳で殴る暴力は、人間という存在について、実に幅広い面から考えさせてくれる。私が人間的だと言うのはそういう意味だ。この暴力が許されるべきだとか、正しいとかを主張したいのではない。

人間は、直立二足歩行によって、両手が自由になった。手の機能は前肢よりはるかに洗練され、道具性を確立した「拳」は武器にもなった。動物行動学の観点から見て、拳で殴る行動は人間的なのだ。だがそれだけではない。人間だけが、拳をシンボルとし、その暴力を形式化し、あるいはそれに意味を付与してきた。しかもその歴史は人間と同じほど長い。

本書は、このように文化に注目した視点から、拳で殴る暴力、とりわけ拳での殴り合いを取り上げている。そこから見えてくるのは、平和で安定した社会秩序を保つために、人間がこれまでいかに暴力に向き合い、それを馴化しようとし、あるいは特別なところに閉じ込めようとしてきたかだ。

## 拳と怒り

人間は、どれだけ他人を拳で殴り、傷つけてきたことか。今まさにこの瞬間も、どこかで誰かが誰かを拳で殴っている。それほどこの暴力はありふれている。

人が人を拳で殴るのはなぜだろうか。この暴力は、明らかに人を傷つけることを意図している。要は相手に痛みを味わわせ、心をえぐり、屈服させたいのだ。

その拳には怒りがこもっている。拳で殴り合う闘争をゲーム化したのがボクシングだが、そんなゲームのなかにおいてさえ、殴る拳には怒りがこもっている。そのことをジョイス・キヤロール・オーツは有名なボクシング論『オン・ボクシング』でこう表現している。曰く、「ボクサーたちの人生を表面的に見ただけでもわかるように、彼らは、もっと深い意味で、怒ってい

る。ボクシングとは、基本的には怒りなのだ<sup>ま</sup>」。

心に深い怒りを負っている男二人が、力の限り拳でぶつかり合う。そんなむき出しの闘争を見る者はたしかに期待している。のみならず勝者の名譽と、敗者の不名譽の両方を、しっかりと見届けないと気がすまない。ボクシングの興行は、そういうものとしてしばしば人々の関心を集め、ボクサーたちの怒りの物語は消費されてきた。

一方、たとえばボクシングに対して「そんなのは野蛮で残忍な血腥い<sup>ちなまぐち</sup>ショーではないか」と、眉をひそめる人もいる。この暴力と流血を嫌悪する感性は、人間が長い歴史のなかで育んできたものだ。だが、逆説的なことに、ボクシングというスポーツを十九世紀に生んだのも、この感性に他ならなかった。

この感性は、他人や弱者の痛みに対する共感にも通じている。この狭い地上に何十億もの数の人間が、矛盾や争いがありつつもなんとか共生していられるのは、一つにはこの感性の鋭敏化があったからだ。この内面的な変化は、人間が「文化」を築き上げ、内なる「自然」の暴力に対してたゆまず挑戦してきたことと、同時に進んできた。そしてこの挑戦は続いている。「文化」と「自然」の対立および調和、という神話の時代からある古いテーマを、さまざまなメディアやスポーツのなかに、今でも見ることができるのはそういうわけだろう。

### パンチの精神史

暴力に関する人文学の著作なら、フランスのマルクス主義理論家ソレルによる古典『暴力論』をはじめ、いくらでもある。しかしその膨大な蓄積に対して（自らの不勉強の暴露になるかもしれないが）、私にはある不満があった。それは抽象的で観念的な議論が多いことだ。当たり前だが、現実の暴力に直面した際に感じる、切羽詰まった緊張感や興奮とはほど遠い。私などすぐに退屈して眠たくなってしまふ。それにしても、なぜ話が観念的になってしまふのだろうか。そもそも暴力という概念が定義しにくいうえ、その中身が広すぎるからではなからうか。個人レベルのちよつとした衝突から、戦争やテロ、デモや抗議、果ては言葉の暴力やハラスメントまで、暴力として一括りにされる内容は実に多様だ。では、いつそのこと拳で殴る暴力に対象を絞って見たらどうだろう。もつと具体的でおもしろく語れるかもしれない。そういえば、拳で殴る暴力の文化史や精神史のような本は見たことがない。本書の出发点はこんなところにある。

実は拳で殴る暴力は、人間の専売特許ではない。オランウータンやチンパンジーなどの類人猿にも見られる攻撃行動だ。しかし大事なことは、人間のみが拳をシンボルとして用いることだ。のみならず拳で殴る暴力および殴り合いを、文化として各地で洗練させてもきた。また殴り合いをゲーム化し、その暴力性を巧みに制御してつくりあげたスポーツがボクシングだ。そ

の歴史、および資本主義との結びつきについては、本書5章以降でも詳しく取り上げている。

タイトルにもあるし、くり返しになるが、拳で殴る暴力、拳での殴り合いが本書のテーマだ。そう言うともまるで、粗暴だとか、半道徳的だとか言われる人たちだけに関係しているテーマだと思われるかもしれない。しかし、この本を手にかけているあなた自身にもきつと関係している。

もちろん暴力の話なんて嫌いだという人はいる。拳で人を殴ったことも、拳で人に殴られたことも一度もない、という人もいる。しかし誰かをぶん殴ってやりたい、と思ったことのない人はいない。また、映画のパンチシーンを見て「なんてひどい！」と憤慨したり、逆に「当然の報いだよ！」とせいせいしたり、と共感したことのない人もいない。のみならず、私たちは殴るとか殴られるとかの現実の場面に遭遇しなくても、拳で殴る暴力の情報やイメージはメディアにもあふれていて、そこから情動の刺激を受けている。拳で殴るイメージと無関係に暮らしている人など、なかなかいないのだ。

さあ、どのページから本書の中身をのぞいてみてもいい。ここにはたとえばテオゲネス、モハメド・アリ、ジョージ・フォアマン、マイク・タイソン、ピストン堀口、白井義男、ガッツ石松、大場政夫、辰吉丈一郎をはじめとする古今の拳闘家やボクサーはもちろんのこと、ソクラテス、ホメロス、ドストエフスキー、ジャック・ロンドン、ホイジンガ、カイヨワ、オルテガ・イ・ガゼー、セオドア・ルーズヴェルト、スパーマン、鉄腕アトム、ロッキー、矢吹丈、柳田国男、三島由紀夫、コンラート・ローレンツ、ヴィクトール・フランクル、デズモンド・

モリス、ジョイス・キャロル・オーツ、たこ八郎、ボブ・ディランをはじめとする、巨人たちがもたらすエピソードがてんこ盛りになっている。拳で殴る暴力、拳での殴り合いが、人間の身体のみならず、共同体、宗教、芸術、心理その他、あらゆる文化の諸相と関わり合っていることが、実感できるはずだ。それもそのはず、太古から現代にいたるまで人間が、このきわめて「人間的」な暴力とともにあったからだ。いや、その歴史は、人間の歴史そのものなのだ。

1章

人間的な暴力



拳で殴る暴力は、オランウータンやチンパンジーにも見られる攻撃行動だ。しかし人間のみが拳をシンボルとして用い、拳の文化を発展させてきた。今やボクシングをはじめとする殴り合いのゲームは、巨大な資本主義的な興行ビジネスだ。このように拳で殴る文化がある面で華々しい発展を遂げられたのは、そもそも暴力や闘争には、人を夢中にさせるものがあるからだ、私は思っている。

血腥い暴力など、自分にはあまり縁がないと感じている人は多いかもしれない。だが、暴力はいつの世にもあふれているし、後で触れるようにもっとも幸せで平和に見える家族のなかにおいてすら、激しい暴力は実は起こりうることだ。実際そんな家庭の茶の間にも、メディアやウワサ話を通じて暴力の情報や映像は頻繁にあらわれているだろうし、もしかすると暴力による闘争を模した娯楽もいろいろな形で享受しているかもしれない。古い芸術作品などに目を転じてみても、私たちの心の深層には、闘争を見て喜びを感じるだけでなく、暴力を受けて無残に傷ついた哀れな敗者の姿を見る喜びが潜んでいるのではないかとさえ思う。

はたして暴力は、平和に暮らしていると信じている私たちの、どのくらい身近にあるのだろうか。また私たちはどのくらい血腥い暴力の闘争を見ることに喜びを感じ、のみならず敗者の哀れな姿を、恐怖と安堵と憐愍<sup>れんびん</sup>をもって眺めることを好むのだろうか。

## 1・1 そこにある暴力

牧歌的風景のなかにある個人的な思い出から語ることにしよう。

播磨の里の風景なら十代の頃、釣り竿と網をもってずいぶん駆け回ったものだから、私にも馴染みがある。だだっ広くはない平地に、大木など見当たらない小さな丘がいくつもこびりつき、けだるそうに山へとつながっている。兵庫県福崎町にあるそんな丘の一つに民俗学者、柳田国男の生家がある。おそらく同じ播磨に対する身近さゆえに、民俗学やそれとの境界が曖昧な民族学、文化人類学にも興味をもちやすかった。その後、私が二十代半ばからベトナム西北部で黒タイという民族の村に、文化人類学のフィールドワーカーと称して長い間身を置くことになったのも、そのことと無関係ではない。

### 血みどろの共同体

そんな私に、名も残さなかった人々のくらしの奥深さを教えてくれた柳田の『遠野物語』を評して、三島由紀夫は次のように語っている。